

## 核なき未来へ

馬場 みなこ

核兵器とは、核分裂や融合反応による放射エネルギーを利用した兵器であり、破壊・殺傷用として用いられる。その核兵器が本当に地球を守ることができるのか。私は確信する。決して、核兵器で地球を、人類を守ることはできない、と。核兵器がある限り、未来に平和はない、と。

私は昨年夏アメリカ合衆国へ長期留学した。「アメリカ」と聞くと自由な国と連想する半面、個人が銃を所持することを認められる州があるから日本よりもかなり危険だ、と連想する人もいるだろう。滞在先のテキサス州は銃の保持が合法で、銃を保持している人は珍しくなかった。ホストファザーのお父さん家族も銃を保持していた。なぜ銃を保持しているのか尋ねると、彼は「念のため。何かあった時のためだよ」と言っていた。それ以上は私も聞き返さなかったが、「念のため」とはなにか、とても疑問に思った。強盗や誘拐犯に遭遇したらその銃で攻撃して自分や家族の身を守るため、そもそも「銃を持っている」とアピールして強盗などを近づけさせないためということだろうと思う。

これと同じようなことが世界各地で起きている。核兵器を保持している国は、核兵器をいつでも発射できる状態にしているからこそ、表向きは他の国と仲良くできる。自分が核兵器をもっているからこそ相手は攻撃できなくなる。つまり核をもっていることが国の安全を守ることだと信じている。これが「核の抑止力」であり、世界から核がなくなる一つの理由と言えよう。

人を、国を守る、とはどういうことか。人とはだれか、自国民か、人類すべてか、国とはどこか、自国か、自国の属するグループ（NATO など）か、地球上のすべての国か。もしも自国民、自国だけを意味するなら、「核の抑止力」で守ることができるかもしれない。自国に核兵器が落ちなければ、放射能の影響はない、国民は無傷かもしれない。しかし他国に落ちれば、いずれ自国にも影響があるのは、今のウクライナを見れば明らかだろう。例えば、小麦などの食料が供給できず、世界経済が危機に瀕しているし、アフリカでは飢餓も広がっている、たとえ、自国に落ちなくても、いずれ悪影響が及ぶのは避けられない。まして、人類すべて、すべての国を守ることなど決してできないことははっきりしていることであろう。核が存在する限り、「使用される可能性」は常にあるのだから、たとえ「守る」範囲が、自分の関係する狭いところであっても、どこか遠くの国で使用されたとしても、核による被害を受けずに済むことは、決してありえない。

日本政府は近年防衛費を増額し続けていたり、核兵器禁止条約の交渉会議に不参加だったり、と戦争の準備と言っても過言ではない行動をとっている。それが本当に日本を守るた

め、世界を守るために行っていることなのか。1945年8月に悲惨な経験を2度もし、世界唯一の被爆国として核兵器廃絶を世界に訴え続けてきた日本が、このような矛盾した行動をとっていることこそが、すでに世界から平和を剥奪しようとしているのではないか。日本が果たすべき義務、それは核兵器の脅威そして日本が経験してきた悲惨な思いを世界に訴え続けることしかないと思う。決して、核兵器保有の容認、あるいは「核の傘」に入っ  
て抑止力に頼ることではないだろう。

核兵器は、「非人道的兵器」と言われる。では「人道的兵器」というものがあるのか。兵器とは、人を殺すためのものだから、そもそも人道的であるはずがない。つまり、人を殺すことを目的にして所持しているものは、核兵器に限らず、すべて戦争の原因になるのではないだろうか。であれば、なおさら、無差別に殺戮できる核兵器は、この世界にあってはならないものだろう。

私が住む長崎県には1945年8月9日に原子爆弾が投下された。長崎には原爆資料館や、爆風で崩壊した浦上天主堂の建造物の一部、片足しか残っていない鳥居などがあり、核兵器がどれほどの威力を持つかは一瞬にして読み取れる。そのような、人をも街をも一瞬にして崩壊した原子爆弾は、アメリカ軍により、日々何気ない普通の生活をしている人のもとに投下された。長崎県下の学校では、毎年8月9日は登校日であり、その日は戦争や長崎に投下された原子爆弾がもたらした悲劇などを学び、また犠牲者の方を追悼する集会もある。

戦争はだめだ！核兵器の使用は禁止だ！と世界中で訴え続けられているが、なぜそれがだめなのか、なんのために禁止しているのか、漠然とした考えを持っている人が世の中大多数だろう。私たちは、「原爆が投下された」という1つの事実だけに重点を置き、なぜこのような結末になったか、結末に至るまでの過程を理解しかねていると思う。戦争をなぜ起こす必要があったのか、原子爆弾を投下してきたアメリカだけが一方的に悪いのか否か、日本が他国へ侵した過ちなどを学び、二度とこのようなことを起こさない方策を考えることが、世界平和へつながる道であると信じている。